

日用心法鈔

中

9
3456
2



口 8
3456
2

藏島

日用心法鈔卷之中

イ

難波戦記は高ひにの虫候お甚きし中あり
是等べき事あり甚きものなり是なる時
中よりぬす下虫にふりあはるるも
其一あり虫候ある事とぬす
虫の頭とつてあり
其入細はつて考ふべし
又虫の
其のつて人をだす
砂の透つて書に
昔より
紙と墨と通用して

日用心法鈔

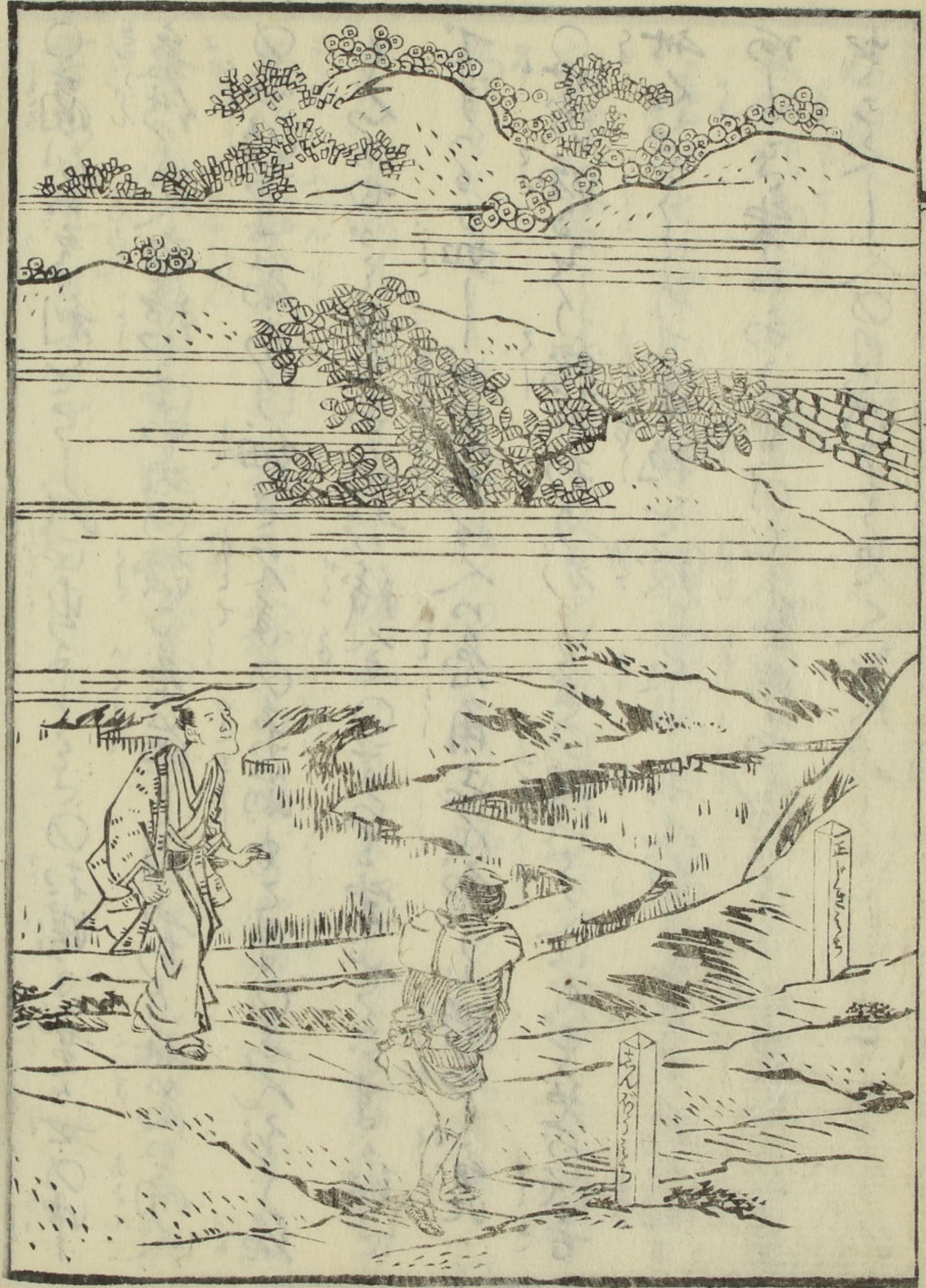
備へ。あつてあゝぬ半く。やも上手よりひあせむ。城や
あり。備へ下よりいづくれとある。金作。やういふおきせ
る。備へ。方便の用。も。場。多。だ。く。く。人の頭。と。く。た。く。
く。た。れ。つ。男。の。か。き。ど。是。と。く。た。き。い。く。く。た。れ。た。も。の。
備へ。あ。さ。す。べ。是。と。お。極。あ。ら。お。た。に。お。く。甚。き。ま。
き。ら。き。ま。の。何。と。く。た。く。わ。く。了。當。お。れ。あ。い。く。喧。嘩。氏。
海。と。か。如。是。城。あ。く。終。じ。の。取。け。ひ。の。方。便。あ。り。か。き。
類。ひ。あ。い。く。く。難。く。う。の。方。便。の。佛。經。と。始。え。軍。急。
其。外。の。く。く。あ。り。又。正。法。佛。計。虚。偽。と。構。へ。人。と。す。

だ。は。あ。い。く。く。人。畜。猪。の。族。あ。り。必。ず。偽。と。く。く。く。く。
是。い。や。い。く。く。城。得。く。に。用。い。く。く。く。く。く。く。く。く。
又。高。ひ。の。半。は。あ。い。く。く。方。便。い。く。く。若。貴。人。が。来。て。あ。ら。相。と。見。
て。是。い。や。い。く。く。車。あ。い。く。く。時。ま。ら。あ。ら。相。が。遠。く。く。く。く。
以。後。く。く。く。又。其。車。後。で。ほ。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。
す。く。く。く。又。船。より。安。く。あ。い。く。く。す。く。く。お。い。く。く。方。便。經。時。の。
吉。相。の。接。接。い。く。く。の。ま。き。て。罪。く。く。あ。い。く。く。是。い。や。い。く。く。
守。と。安。ん。さ。い。く。く。の。ま。や。又。え。く。く。悪。あ。相。い。く。く。い。く。く。
空。偏。く。く。く。佛。神。は。あ。い。く。く。高。貴。不。等。あ。い。く。く。あ。い。く。く。高。貴。

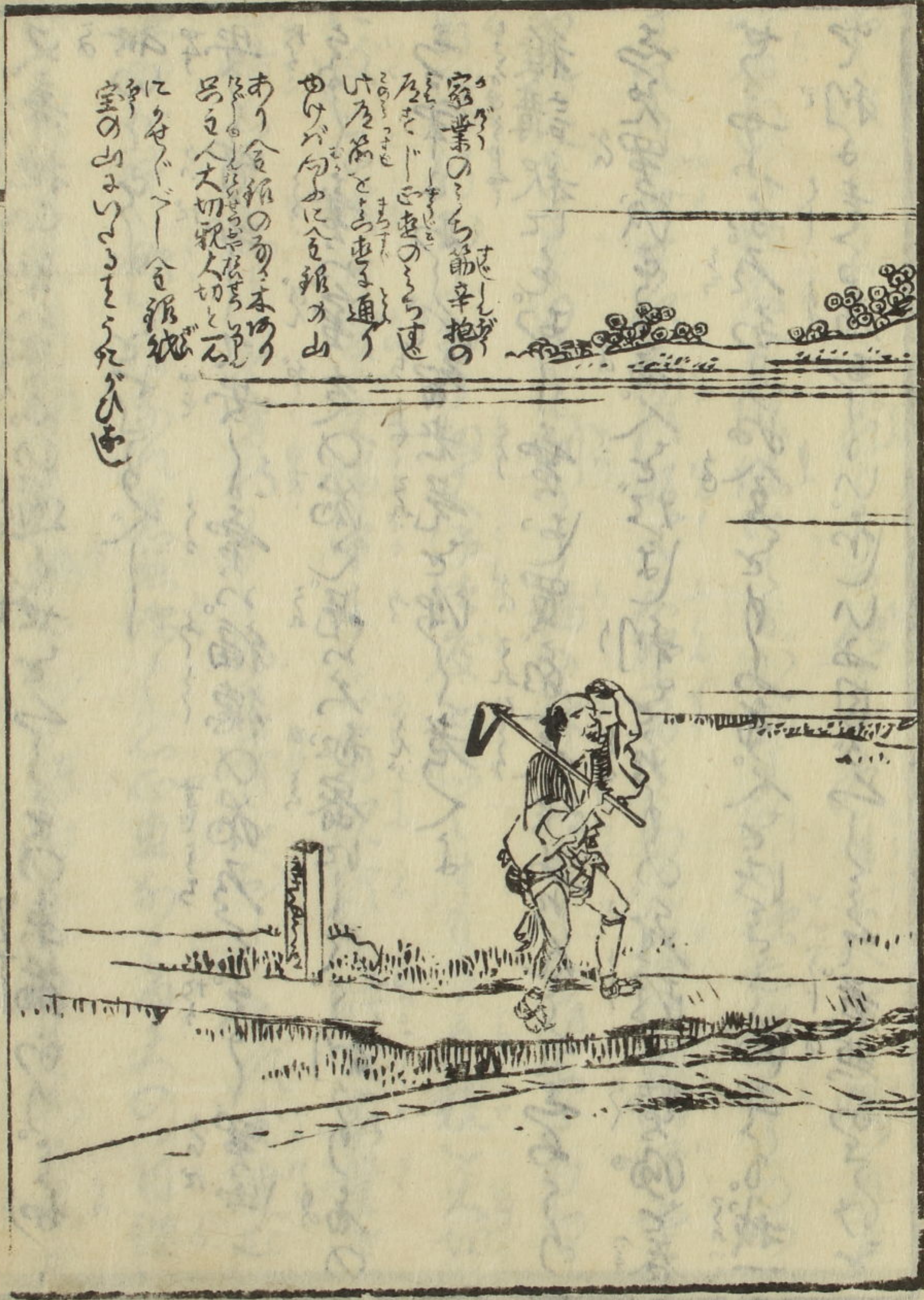
憎むべし

又何程高貴でも買うが買ふまいとあつて見ても
に換ふと半く又安う物を買ひ込めお場を賣るある所
わけて賣ると勿論又安う物を買ひ込めお場がさうな
安くうべし。さういふあり附の端和を徳とてうら
むぬ半あり。極まり依る換ふと賣半あり。その又も
商ひ不買品の内半あり。大抵買ふは方便徳のうらむべ
各々の了當にあつて。拙が篤とてぬ半とてす。此
書ふと。あや

○高ひる利とてうらむとてお場を賣る世の中
系傳人お積り。あぬの後の系傳といふあり。世傳の商人
のうらむとてぬあり。細いえもの系傳のうらむとてぬ
く。あやうくうらむとて。銭金のもう半。せむしあははに
です。うらむ如く。世傳ある人。兎角とてうらむ所とて。なに
○世傳あるとて。楊あり。かゝる世傳の徳とて。いふ。さういふ。伝吉
世とて。うらむとて。半抱を致さる。あやうくうらむとて。あやう
何とて。半あり。あやうとて。兎角とて。うらむとて。うらむとて。うらむ
やとて。うらむとて。兎角とて。うらむとて。うらむとて。うらむとて。うらむ



室業のちら筋辛抱の
屋敷のちら筋
けりあともあま通
ゆひのあに金銀の山
あり金銀のあまの
あまの大切人切と
にやぐー金銀地
室の山よりさるるひ



又辛抱心要の安心の道と世をくまの糸端あり。それ
 世をくまの糸端あり。

安く買ひて安く賣ひ。福德の爲にぞ。買ひて
 安く賣ひ。多量の爲にぞ。是は大秘密にして。何れも
 知る事はおぼへず。智者を誨く者よ。

稚講釈にも。即ち賣に買。お一人もあんとてあつり
 ちえ羅ひさる者人をばほし利をぬきの。新張は勢海と春
 ちやあお。居あゝぬ食をりあも人をばさゝけつ。我一
 や利は走る者。あゝい。不い。お目がくゝゝゝ。慈悲あふけと

あつて、いふまで、おのれに施さるべき人との憐れま
ぬ者といふ福も、人の心で代へてもかゝす。これ換へがきう。いつ
までも出世せん。商ひの成る不景氣とある福の神の力を
あつて、いふまで、おのれに施さるべき人との憐れま
ぬ者といふ福も、人の心で代へてもかゝす。これ換へがきう。いつ
までも出世せん。商ひの成る不景氣とある福の神の力を

相遠^{あひだ}は。あれは半ありとて。捨^{すて}てお世^よの中^{うち}に。い
あれは半とて。是^{こゝ}に通^{とほ}るに。もつて。あれは半。成^{なり}。
あれは通^{とほ}る。は。せぬ。人^{ひと}に。世^よに。いひ。半^{はん}が。絶^たぬ。あり。あれ
は。通^{とほ}る。は。せぬ。智者^{ちやう}といふ。あれは通^{とほ}るに。せぬ。と。愚^ぐ者^や
や。いふ。考^{かん}く。を。

知恩院主人大居士の如方歎は云く。商家の有業を交易
し。実に世間の至宝あり。之を善途に用ひあらば二世
の利益もありぬべし。利倍ばかりありてあきまて。街
衢のものとあつて甚だ自然と其身に報ひあつて長らく

衆有男あて多しの人と。お手にするあねおのそはら
 へ。丁寧ふ正重な身と。おて佛や神を信仰。候納め
 素と。或一はち。お好男と。半疑ひあ
 又昔より高貴お男と。れ。の。全所も。出来ど。各別仕出
 たる半あ。え。より。や。おもの。と。おひ。候。き。ある。あ
 の。と。又。徳。の。徳。が。喰。や。い。や。と。あり。おれ。どの。と。ら
 お。と。又。お。より。お。高。と。る。の。及。び。目。原。篤。信。の。お
 家。例。に。年中。の。入。用。と。や。か。一。張。一。号。を。不。半。の。入。用。と
 ぞ。よ。と。あり。お。見。南。氏。に。て。け。と。と。不。給。者。と



木曾義仲が、此に平家の軍勢を
付勝後、西海へ退き京都の政事をしる

あり。是は今始りたるにわづらひ共、世に挑み、寿永二年の
に平家奮りに長し天子を護りし。万民とあま
半。おとらしむるも、あるも、其の義仲に登り、平
家と西海の波へ退け、安堵の思ひをあらわし。又、義仲
不慮の斗ひ多し。是は依て上天子より、下万民のあげに
以前は倍せり。けし、時の人々けり。是より、平家の仕度、
あしり。是は依て、義仲の頼朝より、あまはる。其のち
信長と好む。政事をあらわし。是は、
ざる。あつて、ねがひ。○あぐく。世に、あまはる。

ど奢は長し。よふ目が舟橋は形か。のしどや。へるより
身のかげを知り。人よりふくやぐり。人にすけつ。しる
是大安んのはる。あて。世の中を。あて。上ふ。列。孟子の曰。王
年と。は。さる。年。あ。ん。と。愚。知。智。ある。年。年。人。
日。人。の。回。し。と。も。見。や。を。改。年。少。く。の。盛。衰。は。あ。れ。た。
其。時。ふ。す。れ。何。さ。せ。が。不。仕。合。あり。是。お。身。の。罪。業。と
天。の。し。と。人。と。も。恨。む。と。改。年。お。れ。行。信。む。
年。あ。れ。篤。と。い。得。あ。る。處。さ。年。あり
世。の。画。表。し。つ。年。ふ。け。て。後。集。ま。つ。く。火。半。板

の。肘。あ。い。火。大。名。元。を。う。草。羽。織。其。か。の。騎。馬。武。者。は。柔
色。の。木。綿。羽。織。あり。馬。の。し。と。る。考。の。形。の。終。り。
火。半。場。へ。出。し。又。板。所。人。寺。方。に。火。半。樓。年。し。ま。の。は
今。火。半。樓。東。ま。う。り。に。も。鑑。一。面。掲。ぐる。種。か。と。ある。是
に。お。遠。あ。
昔。宮。漫。筆。ふ。い。う。備。前。島。山。の。城。を。新。太。弟。少。將。の。御。行。状
と。傳。は。る。故。郷。の。は。る。系。に。い。一。生。少。自。身。を。捨。り。な。さ。る
親。世。より。と。用。ひ。あ。さ。れ。た。る。は。子。の。代。に。い。眞。知。ひ。た。大
繩。と。あ。れ。と。後。托。が。と。れ。て。又。に。て。い。諸。幼。定。の。書。付。

見^みるに^に成^{なり}む^むと^と作^{つく}せられたる半^{はん}又^{また}く^くたり。尚^{やう}書^{しよ}ふ^ふと^と其^{その}子^こ孫^{そん}牽^{けん}む^む。皇^{かう}天^{てん}の^のを^を踏^{ふみ}き^きたり。上^{かみ}天^{てん}の^の載^のる^る也^{なり}。又^{また}く^く其^{その}の^の載^のる^る也^{なり}。又^{また}く^く其^{その}の^の載^のる^る也^{なり}。

君。院殿の御宇あり。又桃源遺事を續けたる
 に西山云の御一生著色あり。絹の疾苦了。ふとんとて。
 身のおびおろしを。御月身子控はされたる故に。御近邊百
 仞あり。人々も慥にハ徳を慕ひしとあり。其勤儉の徳可
 作可畏業と。迎ひてし。水戸頼房中納言殿光玉中納言殿
 御二代の火事相繼ぎ。んさいあり。今に存立せり。今ハ水

戸の事足悦ありてん。んさの火半燭來用ひどあり。
賢君達の御質素有ぐさてあり下民のい出ども。
世方くの五五と察して今日の本とあせぐ。棄の
棄友といふ事、御典をいむ。及ぐ、棄の者の久し
かぐといふ。一部の平家抽移りてん。て、棄れ、二室
夫下子ありてん。天下をほろむ。玉にありてん。王とあらば
一人、一人ありてん。二人、一人とあらば、皆滅亡の種子あり
士君子庶人といふ。近因窮乏を憂念とせし。憂業とせ
て、身と害。窮乏をあらば、てん。政を、儉素とありて、困

義せざるやにぐくる事。立身出世の道あり。儉約は
 張るを奢侈を戒む。精勤と怠惰とを戒む。怠惰と
 慈悲と主張する。残忍を戒む。恭遜と傲慢とを戒む。
 謙虚と傲慢とを戒む。此等を以て治む。王の福は
 下にも福ひと下にも智術防慮の才出づ。仁も
 道義あり。道義とくも古よりある。凶暴は
 福ひ。福は福ひを。維天の命あり。未來降し降して
 威するの理あるなり。人の智力を捨て。唯徳を修めて天
 意をいふ。仁とくも。仁人半を以て天を敬む。仁人

力^{ちから}を棄^{すて}るに似^にたわづなれども智力^{しつりき}で家^{いへ}くはらふ者^{もの}の道徳^{だうとく}乃^{すなは}
そ^{その}もといふべし勢^{せい}免^{めん}走^{そう}る機智^{いきち}後^ご謀^{ぼう}子^こ類^{るい}く戒めどんむ
何^{なん}ぞいふが以上錦城先生の漫筆

吾山徧徧の勿傷。一切の衆。皆天命に任せて。天命を恃む。身を安んずる。而して情んで。天の爲事も任せて。是に依る。其の其家はなす。ある。これありに。遂に。天命を。あて。あてあり。難き業と。あいて。せんと。する。心を。苦しむ。の。その。物。毎成就する。こと。遂に。能力より。あてざる。こと。天を。任する。の。か。い。あて。ず。所。あいて。せんと。あて。る。爲。事の。こと。に。計。ぬ。

律と形ひて己を失ふは天命のいんゝもあぐゝ成るべ
 り。ものれが名利と好んで、身と惜むるは是則ち身を失
 らぬといふもの。只我は、うづらとほいて、天命はたそれだ。
 世々く廣く、いつに何事をもつものあり。古來にの
 ○世の中へむづろの本は、さうさうぶ、むづりれどおれをあら
 ○何事もよく安んず。世の中へ人とおびく。うづらありあり
 世々の心とす。情に人皆靈明あり。吾等邪正ハ善又誠
 す。さうさう知れば、ありとくとも、月夜ありぬ。天命業因
 縁也。月夜はあやうき放人の月夜。成る律あり。つねに形

の為ためとつらひ。心の爲ために形かたち苦くる免おの已まむとこれおの頭く例だいて
 牙は痛いた苦くると通とおあり。只ただ天命てんめいは任まかせてさうかとおるわん
 おのつゝ自じずあじ。天道てんたうありて已おのまむが受うくをえ
 ぼる極ごく苦くるむあり。是これ天てんの苦くるをさるにわづおのれがこ
 や苦くるむあり。たゞ人ひとは身みをよせてやあらる者もの一切いっしつの
 中なかに皆みな亭てい々の為ため次第しだいをえを修しゆふせんとうるわ。あひ
 あるが如ごとく。看かんりのかゝりて大おほ家やは仕し最さいさうてあら
 め半はんく。あいてせんし欲あや。大おほ家や修しゆりて看かんを過あひ立たし
 とれをえん。天道てんたうの仕し最さいわんや。おももの。我われより身みを

おきりくをうごくとあつてふをうごかしたるくを
 ぬく¹³とやあけ¹⁴にあ¹⁵ひ

○ 収め。ふまゝに。収められ。天の収者の。若果。是非あり。は。収め。ある。身も。収め。ぬ。といふ。遠の。あい。半く。是は。

修しゆ子このお身みを。修しゆ小せうと。又また尚なほく。修しゆ子このお栞しやくは。別べつ行ぎやうと
 り。いいといけけ通とる。は。お遠とほ近ぢかに。旅りよ考かうへ。更さらに。變かは向むかひひを。○と。ま。ま。
 や。身みのふ風ふうあり。の。柳やなぎううね。世よ白しろい。葉は吹ふき。あ。て。何なんも。な。さ。ず。又また抱かかり。
 凝どろ滞たいせ。ぶ。世よに。サ。マ。推おしううつ。る。人ひと々々わ。あ。ううつ。れ。て。い。人ひとの
 安やすん。目め前まえも。ス。る。が。如ごとく。

○人と責^せめられ、それとやらをやらせられん。丈夫仲間の大將と云ふ
世^{このころ}あやと合^くはせしむ。是^{これ}と終^{すまひ}ありて、身^みとあじしんとせえて、勤^{つとめ}
にあらば安^{やす}んぜしむ。人々私のいふことをききて、天倉に候^{まちうけ}
座^ざへ移^{うつ}りて、おのれがひいきをして、ちひある河やすらとひこ

庵うへいしひへふ子換さる半あり時を徳に時をえ
 すてふ耳あの日和とやぐ晴て月立の日もわづは是と
 得ざる時へ福德と換ド。天の思ふようめづるのみ
 ○嘆りし人の気れいらぐるま喜のしらぬ身とあらばあれ
 大僧正意香のかみ

○附—おれが求む人も来ては見る。柳橋の裏にこれと
是て来るものゝ如く、田畑に出る、桑麦のちやぐさ
とすらて食ふと、若くして前の方には喰へぬ。うづり
ざるが如く一切の米皆くの如く。甚しき時はちやぐさ書け

は。時^{とき}を先達^{さきだち}との叙^{ぎやう}
 時^{とき}におくもの殺^{ころす}
 と有^あせら
 る。
 愛^{あい}する時^{とき}とすれといふ大度^{たいど}の事^{こと}あり何半^{なんぢ}の時^{とき}と
 すべしある物毎成就^{ぶつまいじゆう}離^{はな}れて時節^{かせん}を待^{まち}て去^{いづか}
 平伏^{へいぷく}して急度^{きゅうど}取致^{とりいたひ}るに

[illegible]

で毒をおく。人がききとつ。是はお遠い。あは
格定漫筆より。老人のゆくゆく。人の身とまんとあふ
あら。苦みとあふ。ひ動免。苦みとあふ。家はまゝ入る。
まにまに。ゆくとまゝのく。西に。あふ。半をあふ。西に。
あふ。家はまゝいれ。まにまに。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。
特の名言ありと。又あふ。

○後半の。どうして邪で面削で。こむろあてやであるゑ
世通よとうお遠さういく邪ねえくも西せゆとあて成なりし面白おもしろいと
あか家いえまをへに放はなに福徳ふくとくとちんあて今いま後悔こうかいせんあ

万あり。あゝ人君を討。けり。ひ。過。て。毎。日。
 苦。む。故。親。を。誣。り。あり。

○善き時。榮花の愛を以て極む。胸にも成座くおそれる所
なす。世通る。何れも善き時。榮花の愛を見せしめよ。○善
か。實際と大眼目。いかにせよ。うおされて大行をおぐ。
是月業自得の地獄のせえあり。思ふに。苦愛とおひあ
半をほして免。苦愛とおひあ影は入て福德を求むまじ
次庵和尚。今秋庵中を清辰に帰し。これ書きて。
歩手前。万幸也。覺所要しの先書き。何事ゆ天々此身

元藤とせよ大君の大名と共後く。又ある所別天原も他
 そろと中にてい。百石の身分をて。式百人の件は
 天道よりむき。身は似合たる振露といふものなり。一々美
 之神に責られ。罪をさるものなり。轉の馬似する鳥水と
 のんで死する。天道の間にてい。あうのいれをさへばして。
 人毎。天原ともか。いひは。痛て居ても。天道より。餅
 食をわくられ。あまや。あつたひ。あつたひ。あつたひ。人ハ
 あくは世に後る。天道にてい。あつたひ。細工人もさあ
 あつたひ。世に後られば。あつたひ。人を定本とするもの

けり。幸ある者の勝手も考を定本とせん。二五の十八に
 なる。分限と考へて身をお題の下紙より分列せしむ。
 まるき。ぬやうにさういふ人ともいふ。かたは、お題の
 て。分限より。振舞ひをきく。是れ天原より書きたる
 あり。ゆえに。悪戯に。その寒さをものす。若暖りあれば
 明年の弟木。うらまへ。夏つまつことのあてなり。
 あつが。これは秋の実のう。万半河。相毎位を
 数ながら。玉座にてい。大小廿五。身の分限は。通じ十人抱きて
 出る。屋敷に入。七八人のみ。おぼ。後悔する者あり。

月と云はるゝは十五夜の満月なり。此の十夜は、
世に衆生あるは人間の見せしめにして、亦その

〇是の如く、月をさぐて、日月の十六夜の空や、人世の中
世に衆生の如く、文化を成し、是をさぐれば、金も、
銀も、石も、如く、何れも、あり、いふ人あり、
金も、銀も、石も、の如く、列せしめ、親類をさぐり、
親類を、
善の如く、さぐるも、多し、善故にして、善の如く、是有難
教あり。教あり、意ある天道と、いふなり、
要あり。古今、
要あり。古今、
要あり。古今、

合意あり。身分、不執、意の善、
善の神は、
おど、
素ら、
むく、
おど、
く、
て、
也。

やうあれども。信ある大馬鹿といふ處へ。唯二百人の如きあり。又信が身の苦しくあり。戒の智者は五百人此の如く。音入と見せて。或る人の内徳の字に云々。安んある極子があて見て。先づおろし。又二百人。身と土をいふ人も。いふ苦勞とする人。二百人の身。信と土をいふ見せて。何の蓋がある。いふやせぐさなく。あていふ。使してあていふ。身におもひより。也下の及。通。是安んの大逆。大智者の通。いふあり。○十人は満ちた。世のおり。只毎と。かゝいふく。

○これよりおより下びてきて甚多くの種とあるべし
 所をすくこれより考へよ

大和論借は曰。天道といふは車なり。天道といふ方のあは業
によりて。常罰あり。人毎に天にすむをといふは道理
あり。人半をばと免けての後。天道はゆるぎ。人半
を勤むとて。天はゆるぎ。天はゆるぎ。天はゆるぎ。天はゆるぎ。
よからぬ。いふ。人毎に天にすむをといふは道理。
あは業。天をばと免けての後。天道はゆるぎ。人半
を勤むとて。天はゆるぎ。天はゆるぎ。天はゆるぎ。天はゆるぎ。
福福を其通あり。人のいふは。天はゆるぎ。人半

て其福徳の河下されてもまゐる。天の御心にて重んじ
天より速く取納利と申して下さる。若早く取納の元速
執してあつてお尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
は。大いなる御心。急度お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
のついでに。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
又此の御心。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
ば。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
之れ梅の實は。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ

慥成半と天の御心にて重んじ。又天の御心にて重んじ
て。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
我々も。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
さ。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
至極の御心。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
み。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
聖神の御心。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
さ。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ
賊の御心。お尋ね下さる。又天の御心にて重んじ

兵糧の下貯と倍ちて移る。近頃の百姓の軍役は免ぐこと。
あり是の上は三人の出入用は得る處を半し
又人の家虎を四合箱成宝成取と盗人としりあるを
あつたての事を見せしは言を吐肉證する人の
物を掠め私曲侵せはて下の物成多う己をの得る物を
さる人あり。あつた人の上下するの病相とあるは補給
さる人をむねを若くしてある補給せられ我は味する人を罰
する。是役人の大罪と世を吟味して給ふさるやう
まゝさる一あり。世半の事あるやうにほむ處一人を

そ一身をなほと指え之世貴爵は明白あり

聖神あり明鏡の如し

大學曰。百乘の家少。聚斂の臣を畜ふ。聚斂の臣
あつたり。寧ろ監臣何れと。世に百乘の家は軍役ふ
兵車百兩を出て武家方の半く。日なれは名元の事也
聚斂の臣は。定りたる事。其のあつた。あつた。あつた。
あつた。下民を苦しめ取して。其の事。其の事。其の事。
の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。
其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。其の事。

ちうに下を用ひてく。あつてまんの民は信じてかれ
 孟子は曰く。李氏の宰と爲る其徳を改る。宋あつて
 而て賦粟化り。倍と。孔子の曰く。我後非ぞ。小子鼓
 鳴して。あれを攻て可し。是よりしてこれを見れば。君仁政行
 るべ。これを富む。皆孔子は棄る。者く。孔子の
 才子冉求といふ者。魯の老。李氏の役人の政とある。人
 季氏の民ととある。悪と改る。とある。冉求て都
 宋粟運と。民は取。宋化り。倍せり。孔子是を笑て。ふひ
 沛。後。鼓。され。冉求。我。才子。あつて。小子鼓を鳴して。

是を攻と。作られた。鼓ひあつて。攻と。罪をひひたて
 わつて。攻と。改り。孔子冉求をなら。捨る。言ふ。あり
 たり。孟子亞聖が。ふり。よ。て。改。考。る。れ。が。君。た。る
 人。に。改。を。行。あ。る。べ。あ。て。民。百。姓。ど。の。より。奉。貢。等。と。あ。つ
 て。す。り。餘。け。い。と。る。ら。孔。子。が。棄。ら。れ。て。國。家。と。亡。と。く
 と。あ。つ。孔。子。は。捨。ら。る。人。あ。つ。て。世。に。安。ん。だ。は。い。り。見。え
 よ。つ。て。宋。を。失。ひ。一。生。改。れ。本。と。成。て。難。義。と。い。ふ。か。あ。つ。て
 万。民。より。奉。貢。運。上。と。至。る。迄。の。う。す。り。列。候。と。さ。る
 半。あ。つ。て。若。取。あ。る。其。身。は。只。ひ。ま。つ。て。不。仕。合。と。あ。つ。て

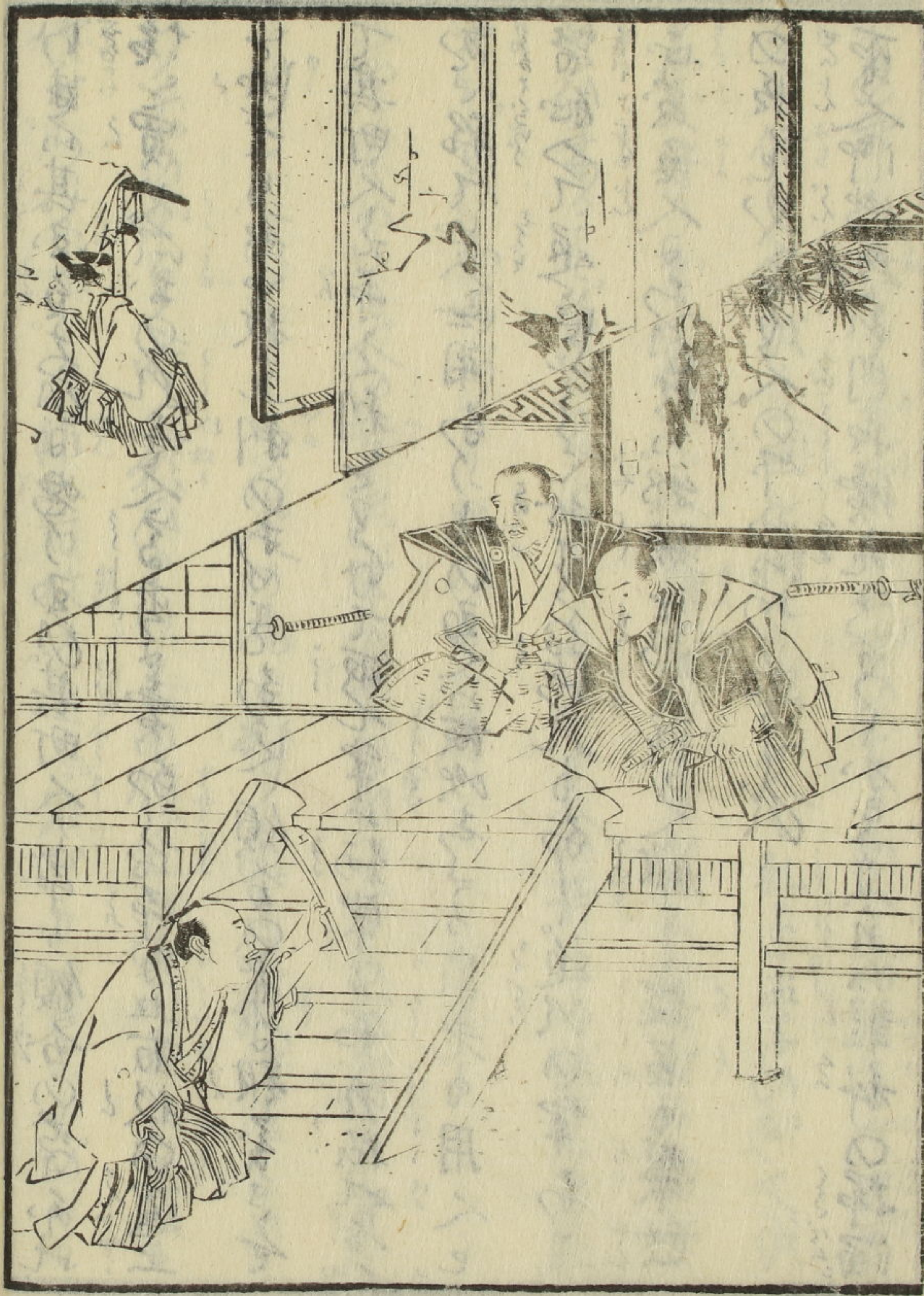
と申す夫と申すの意半不仕合のさうあへては後手次君
身と儲免家成立國と持てとる人孔子孟子のおくは
急交守り玉ふ屋一人の難をとりぬ人の其身をあへて
男ひまゐるもさうとくさうもあへて人の苦しくはくはあ
者家のふらあへて難ひあへて

○かゝるめは人の苦き半成せ家のほらあへて
のめくのさうえあへて人の為よかへての救成はて
あへてのさうあへて所人おひりけるは領分の境同屋を私一人
仰付られ下さへて箱立百枚の運上あへて

けむ其まゐるまゐるはあへて其町人へ予が領分の者おけ
後を買せむおのれさへてあへて予は五枚の運上
をさへてあへて利のおけあへて領分の者は難をさへ
て其町人へ予と利をさへてあへて半の何半やあへて
かゝるめは人の苦き半成せ家のほらあへて
皆あへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて
正教も人あへてあへてあへてあへてあへてあへて
のほもかへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて

聖人御傳授家内お授けさへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて

家老用人五右衛門の
運とていへば顔の
境のなと人の町人といふ
あて殿にふひまうらう



で願戴さじ。國家をたのみのたすものあり
度量持ゆる。取與各節とありて取をを種族せん。わざ
もひ是より起るといふ事。世道理を治くあれ又徳恵化
あも。すすも物をそり。ぬり友人の是をそり。いの橋子細
あじ。能く分別さじとあり

聖神の御遺訓あも。吾恩と志を時。忠臣倦屈し。其
切もあ。其徳もあ。ある。櫻の録をあ。金銀試
あ。ゆれむ。切河考。録をあ。て。何れ作のあ。さ
如。あ。れ。む。珍。し。う。む。と。悦。む。ぬ。も。あ。り。と。あ。り。是

お遠は。能く分別して。誠意をそ。る。大切の事。孔
孫。子。思。の。曰。事。與。ん。より。物を講。経。遺。棄。せん。と。い。じ。と
い。ふ。事。の。吾。半。を。そ。る。事。を。換。は。あ。う。と。い。ふ
と。ある。ま。た。谷。川。へ。投。捨。と。い。ふ。も。と。う。さ。い。と。い。ふ。事。も。
能く。吾。半。あ。る。事。を。合。成。は。い。や。て。も。お。し。さ。る。事。も。あ。る。
も。お。し。さ。る。事。も。吾。半。に。一。銭。も。お。し。さ。る。事。も。お。し。さ。る。事。も。
あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。
あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。
い。ら。い。と。い。ふ。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。あ。る。事。も。

神神屋の丁稚あまきとて
 うきやの猫はんぐさ
 たるけいり考ら先祖の系業と
 さいひいりちちちて今をのまん
 とも其んのさあちちちちちと丁稚
 猫の如くうき世間まき
 ゐひちちちとていひちちち



○情はれ身は大事あまき人万々にけりて養られもあり
 ○系業はてねく迷懷まんが半見物とて新麻さんせい
 ○身のおいし酒色好む日暮とんり利を好む人
 ○後世はてふちあてせいおせよ神のまぐさて新まぐさ
 ○今季か。はに人か金持てあま乳母ちくもいれ世の中
 上のおれんを考て身を惜む。人喰肥て日々の勤ちもく
 若輩の心持もあまき酒囊飯袋とて洒ちろ。い
 袋も同あくとつ半。書言故半は見えたり。人々飯袋酒
 袋も。一をを送る。とふれ人とて恥ぢさ半。若輩

の入物福徳の象とあり

孟子曰天子事て祿を儲け以て死を俟たの至くと
然らるる吉凶福禍はかぎりなく正しく身を儲ければ
是れ死を待てば是れ人君子の心也世心を以て世を
養ふ。若し福徳をばうと若し其終死をば
是れ安んどの道也孔子も蔬食水飲水も飲脱を曲く
ふれ枕を樂む又其中にあり不義にして富貴を
あはれて浮世の如しと作せられたる然らるる孔子も
うまい物にばうといふものもあらば味あひ物をばうて不

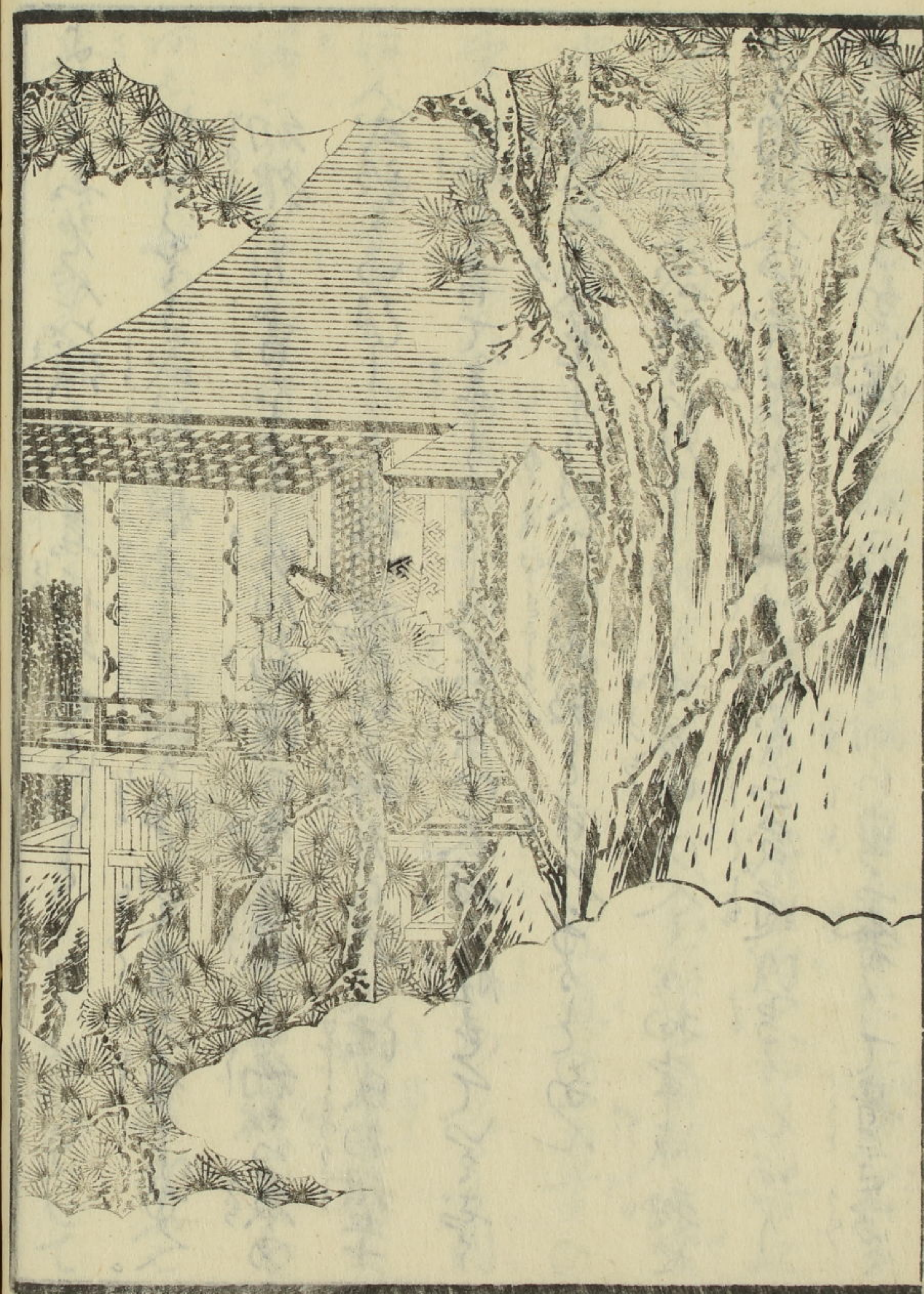
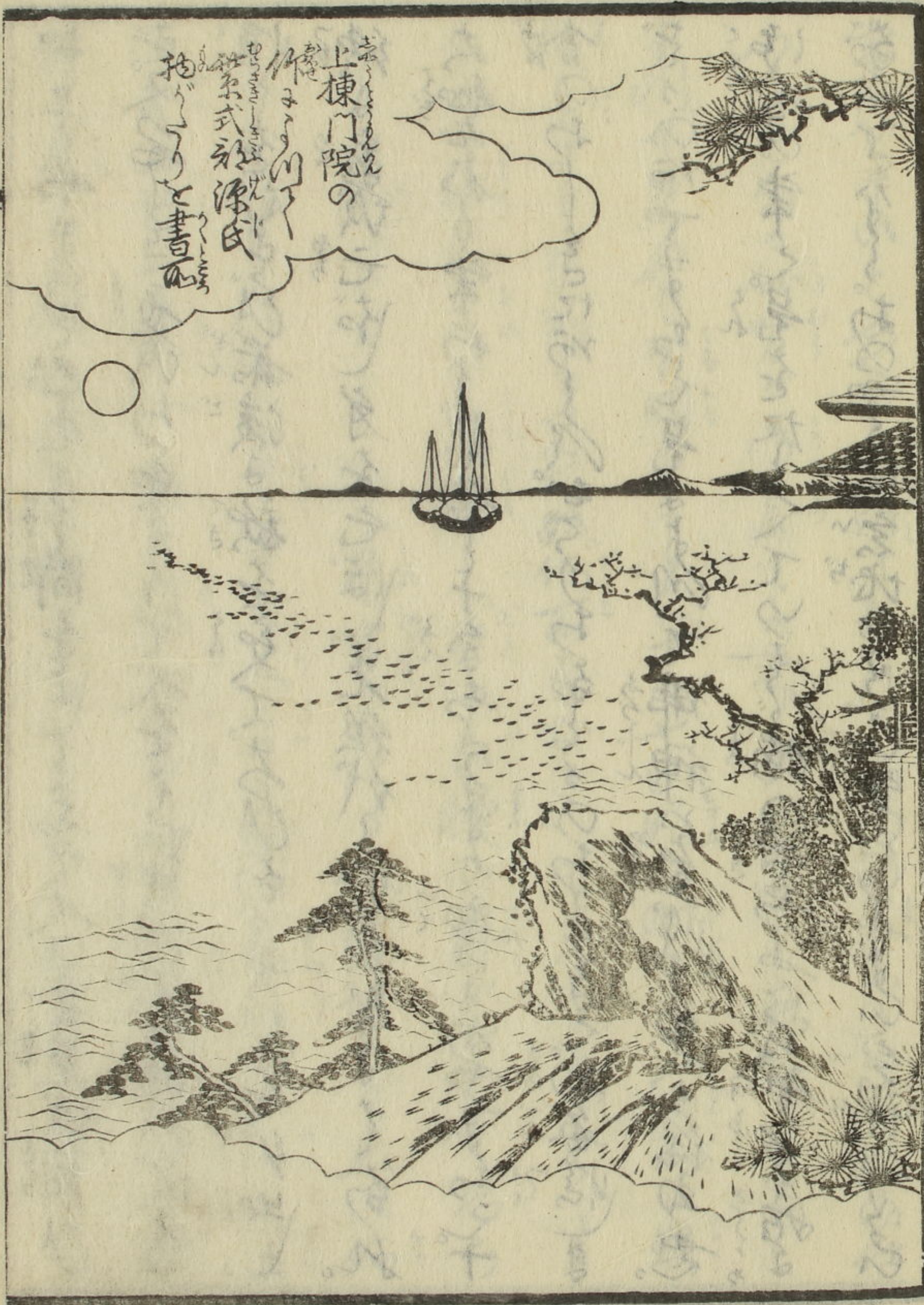
ふまい玉又湯菜のそにけれども丈もあらば水を吞
てけり又玉枕で一寐入と思ふもの丈もあければ脱曲
てそれを枕してけり玉樂といふもの其中はありく
すあまをばうて位にのりたりをばうて福徳をば
がらあはれてあま半浮世の如し又く金くあし
ものゆへくく是れ味ひ玉くあり

○世の中にあはれせて来たぬきうてしては身をばうれ
○世の中にあはれぬきうては身をばうれ
○是と出づる是と成るを合せ其後々に世をつくる

後にも吾をあさじ。福徳の形にぞくものまじに。聖人君子
のめいといふも。世あらんは。落きて昔の迹くもの苦に
せん。樂はちくものこのよりことな。品吾ん言ひに樂
して。善くあふ。いふても安泰。福より。眞の富貴の
業をす。あさじ。業式のつら。皆人無。おめ。さる肉
は。人のいふ。先ちもす。いれ。道をさる。んち。其をくめ
得て。人の終ある。時。皆善く。て貴き。ひや。一。先。誠を
あさじ。世のく。もの。の。佛神を。ひく。あへ。孫。あさ
其を。ひく。あへ。て。ち。く。あさ。ん。より。い。く。あへ。て。して

よから。あさ。ん。の。誠。は。大。意。大。悲。あへ。と

世む。く。も。式。の。新。前。も。属。時。の。始。て。又。学。有。く。あへ。
初。報。より。書。を。す。く。あへ。和。漢。の。文。は。通。く。初。ち。の。後。の
式。の。い。ひ。く。上。梅。門。院。式。の。作。付。ら。れて。孫。氏。抽。像。卒
也。此。を。書。て。あへ。せ。く。に。美。葉。の。卷。は。勝。も。て。い。く。あへ。
書。ける。故。是。より。改。て。あへ。式。の。と。な。れ。あへ。と。あへ。
い。く。あへ。式。の。い。ひ。く。く。世。界。中。の。人。く。あへ。抽。像。成。新。せ
さる。肉。の。人。の。美。見。を。も。後。世。礼。義。正。義。道。ひ。あへ。ん。あへ。
美。を。業。う。め。く。得。て。人の。終。ある。時。の。皆。善。く。て。貴。き。ひや。く



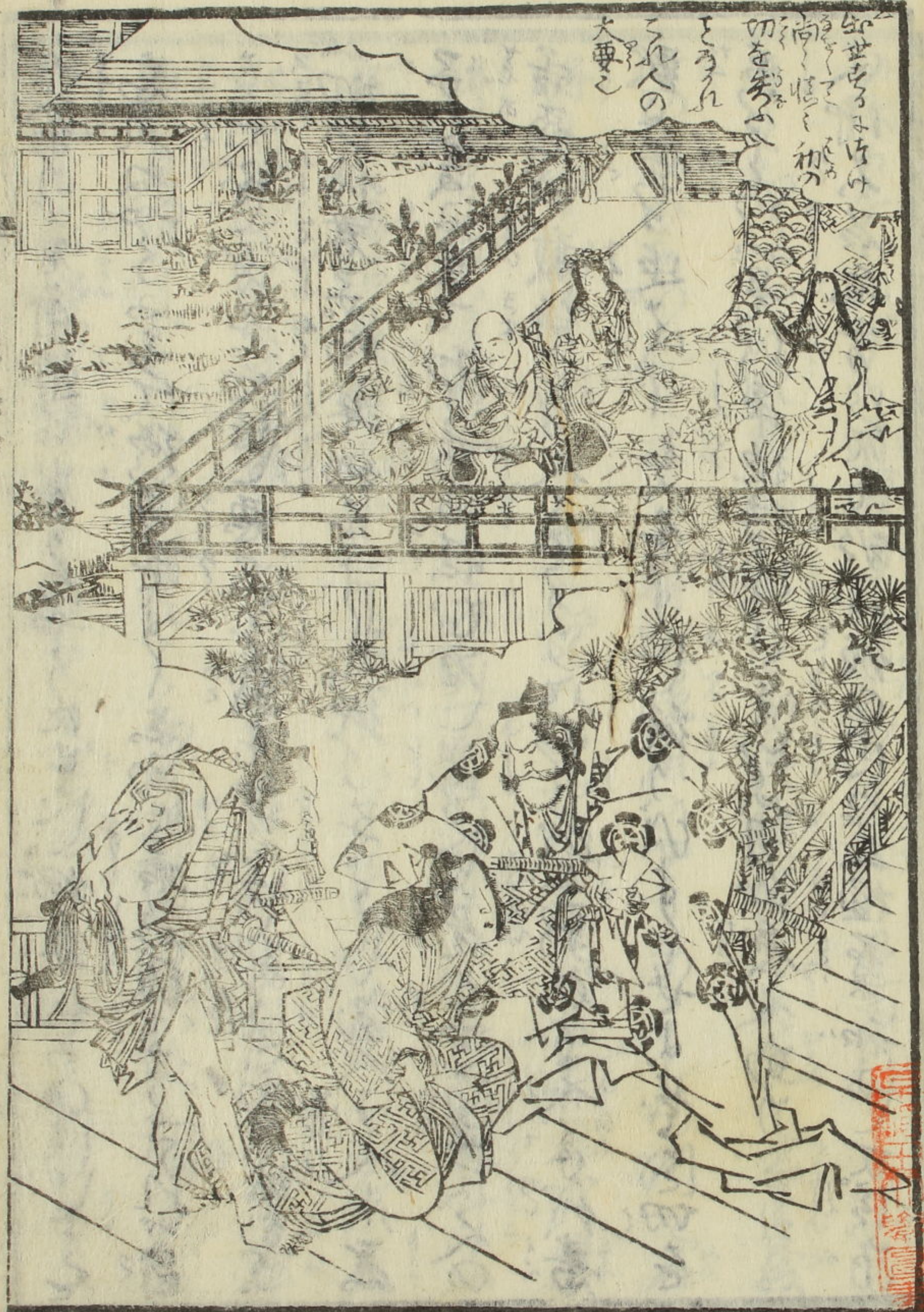
たてていふ代の役を代の職を見て君られ甚なり
ありなんにあらじがくせはじとせども其後
にありぬれむじと因ドやうありて又代人より
くつるく和れ随分ちちの樂白ふ勅るふあれ
史にて勝多ありと貴のあれとゆいられ
ありは形ももの漢の武帝帝の玄宗とあども
の役なりしが後あらはにやうに。朝に清盛云
いふなりとては代人のいふをせし人。我
の保元平治の私軍切あらはて官位は進みおま
り

代せられ帝室の私戚とあり。権威を大ひにあり。其
二校系皆悉く。高佐多友は登る。安子至て希後我
候起つて大ひは彼を換せし清盛とくむる伏すて
悪人のよきとせり。相なりたれの人なり。彼を棄和の
人あり。情も深き人。是よりして其の軍に勝。平家の
御代と名ひあはしむ。衆人の切し。是人のいふは誠なり。元
と和合て合戦あり。破し。其を叶ひ得て人の情は威なり。
あたらふ。其の慢る。其の安悪人あり。是よりして其の
比。其をばらけ。是の情を失ひ。道は背なり。

唐の玄宗日本の清盛公を人をもて
初めの名將仁君の名を失ひ
あつたまゝていせひあるに
ほひ



知世をみけ
尚ほ初め
切を失ふ
とろれ
これ人の
大要



ある。兎角道は省ぬやうにさだ何事初めのほいそ
あれぬやうなまて終るをすゝまぬ。若くはさうなれぬ
を七也。身を七ぼし。悪名を残さず。度し。妙念あり。あり
一切の諸君子。何事初めをすゝし。終るをすゝし。小人と云
子。愛に至ておつる。情む。度し。悪名。是よりさきて人の
吾惡哉。裁許する。人さうにわづ。一郭の百人。代番
歌。至る。近。ぐ。免をすゝし。終る。びすゝせよ。是を。切を
さう。いつ。是。裁。許。は。遠。さ。さう。目。か。度。人。あり
又。御。大。石。元。方。に。て。も。初。居。居。の内。に。至。極。業。初。め。て。下

の。保。ち。を。い。れ。す。道。は。さう。連。る。名。將。と。見。れ。れ。も。二。王。の
も。と。あり。人の。候。あ。つ。時。に。さう。お。終。我。慢。が。名。記。て。さ。は。後
士の。保。ち。を。い。れ。れ。ま。に。押。込。隠。居。の。や。あ。つ。て。何。つ。て。名
將。は。あ。つ。が。じ。は。さ。さ。又。人。の。上。ふ。ま。て。人。の。善。惡。裁
許。する。も。さ。善。惡。正。直。を。以。て。万。民。の。安。ん。を。名。の。取。斗。ふ
度。し。依。怙。具。實。あ。じ。て。不。実。の。も。う。ら。い。有。べ。う。べ。善
私。わ。つ。て。吾。惡。混。雜。せ。ら。ち。ひ。あ。つ。さ。ひ。を。受。て。先。祖。又。母
近。の。名。氏。さ。じ。株。家。督。に。さ。さ。あ。つ。思。ひ。じ。情。む。じ。何。れ。の
以。元。も。お。慢。身。持。手。を。受。て。善。惡。正。直。を。さ。は。後。さ。う。

忠臣義士とお決りして我が家を治るるべし是則安ん
のわく福徳のわく若くは慢放逸依怙負の沙汰わく
要ひの来りて終地の玉れ飛より早く覚悟わく是誠
なる妙業なり世との福徳といへ人あき敬せしむるを
中むるべし是なる富貴と云ふべし世の人は
定免あが世の安んぢるべし梅の尾の明恵上人は
のくやまひ我は毒を何と云ふものこと思れぬ又業
敬は好されて接をもちあふの作せられし誠け通る
お遠近人にうやまりてらんをひく其徳もあき人の上

みまはたひある接なり君子の人を兄を知る小人はこれを
あるとわく何れの道にも是るべし一切の邪僻は
いふべしと云ふと云ふと云ふ世の来りしを
欲邪謀せぬ是るべし誠なりて道をもちにわく一切の邪
僻も是る半をもちと云ふよりあきらむるは誠なりと云
わく福徳の根なり又忠臣義士の徳をいへ人の意見は
半に至る大切の事古語の一言の意見は千金なり
意見は人なる人は必だるなりと云ふと云ふこれに
お遠近人の意見をよく聞け大聖人孔子は丘が孝ひく

過ちおれど人必きそ是誠知ると作せられたり。又衆子たるは
 世の衆といふ也。又大衆の中もあひ合せて人の苦言いと先
 を問ふ。

○^{いけん}又見ぢ。ちやぬ人。しるぬもの。^まれまゝでたひとえらむけ
○おやすらぐ。^{たらま}あつたて。びんぼうくすよ。^{すり}負かしてとお

○ 誰が身おも。さうのせへおりときく。我度も又ひたぐりるに
お供えす。よはまぢあふ其苦のこそ。一季居の奴僕と。
定められ。お供をしてはうみやりし丈や。おのみ

○奉^{やう}云^こふ。昨日^{けふ}のしつ^{しつ}追^おひ。もさ^もれず念^{ねん}紙^しいれてはくよ
是^{こゝ}月^{げつ}日^{じつ}が定^{さだ}まつて婚^{こん}め^めの情^{じやう}をわきまお供^{おとも}はあ^あ板^{いた}お供^{おとも}は
さうおといふお^お。又^{また}人^{ひと}間^まの甚^し苦^くの^こ。畜^{ちく}せ^せてさ^さ。便^{べん}お^お
而^{しか}に^にて^て。横^{やう}道^{だう}を働^{はたら}くもの^{もの}。丈^{せん}故^ぐ古^こ借^けの^の。一^{いつ}屋^やは猫^{ねこ}あ^あ
ま^ま。白^{はく}晝^{ちゆう}ふ老^{らう}氣^きの^のあ^ある^る。是^{こゝ}其^{その}他^たの^の。一^{いつ}朝^{あさ}の^の内^{うち}に^にく^くの^の。
猫^{ねこ}が^があ^あ。ぬ^ぬ。糸^{いと}づ^づも^もが^が中^{なかつ}出^でて。お^お供^{おとも}を^を働^{はたら}く^く。と^と。保^{たもつ}し

